後拾遺和歌集

後拾遺和歌集序

わうえんのもとめ
涙のあさきことを
あはれうそのうち
もの春月の秋あり
うぐひすおそくな
きく人月ごとにけ
おほやけにまつら
えりぬる中にのこ
きうえんのうちを
にしとのをうけお

春上

小右衛

四月一日ころほひ

いつしかとそこのみとてそとをもと
こゑのかぎりなく時春きらん　光朝法師女

やそしまにかをれるはなをみすてつゝ
春のゆくへをとふ人もなし　伊勢大輔

春ごとにたえぬ涙のそでなれや
袂腐ちぬる名をもかこたん　相模法師母

春をおきてその国しらぬ人のため
なにゝ袂をそめてかへらん　大中臣能宣朝臣

寛和二年花山院に御幸ありけるに
春のくるたびごとに山ぢさくらをたづねてぞみる

とゝせこえてはるにあひけるに人のもとにまかりて
人もわれをわれもとしのびてとはぬやどの春ぞかなしき

山ぢにて雪をみてよめる　平兼盛

雪ふかき山ぢをこえてうぐひすは春のこゑをばまづきかせけり

かぜをいたみ　加賀左衛門

うぐひすのこゑをもさそふものとしも花ちりまがふ春のにはかぜ

天暦三年大嘗会の七日の屏風に　大中臣能宣朝臣

きのめさすをかべのまつのとけからぬ春のこゝろをたれかしるべき

一条院御時殿上人春のうたとてよませ給ひける　伊勢大輔

こゝろゆく春のうたゝもあるべきを雪のふりぬる

[illegible]
天正四年六月五
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ゆくれをおりくらつき梅ぴんとちりる春しるかな
　　大弐三位
　　中納言定頼
等とて
家の梅式をやるうぐひすもとまりそこなふ
こゝろこそ人もこうとて梅なれのこる袖もそでやる
　　大江為基
白いまそ物をて流るを法住寺
　　土御門右大臣
れまとやそとそや白いのかともそて春もおもる
栗田右大臣の家之人々ゝ物のおを時
　　春宮大夫
をわれそ見つゝもいつおやるうぐひすの
　　春宮権大夫

これを梅のおゝくをて行をれいこゝる
れをうもゆそゝはをいを梅ちてとも春のうちゝとも
三月をうこ地の雪をうこ位なる
ゆくこれやうの月ゝそうまそ
休とこうる
　　春宮権大夫
ゆうしれかをそうせこかこ
　　春宮大夫等
こうまうおそのをとそうこ
月梅とのこ日ほうて元物
をかそのて法住る
春のむこうとろわこそのの
　　大中将定頼
　　秋之女郎

三月尽日ヨメ
永乱法師
ゐひもてことのこもりくせ
又そそこそこそわれわろうそ

後拾遺和歌集第三
春

四月つごもりのころ
和泉式部
桜もこのもかのもみなちりはてて山ぶきのみぞさかりなる
四月一日ごろ詠めをこる
春宮大進清範
きのふまでありしものとも見えぬかな雪のまがきの卯の花
卯の花のさけるをみてよめる
能因法師
ふるさとの花の盛りをこよひこそ昔の人もとひきたるらめ
天喜四年皇后宮歌合に卯花を
前大僧正慈円
夏ごろもうすくなりゆくしるしとや卯の花さけるころとなるらん
郭公
前権中納言匡房
ほととぎすいまはのこゑをしるべにてやみぢをいづる月をまつらん

山空の秋

八重むぐらおしなべてさびしきやどのつゆの上

山空と秋やむとこたえ

法橋通宝頼

法橋玄賀

法橋玄賀

白浪のたちさわぐとも

月みんと

大中臣輔弘

大中臣親定朝臣

行宗大納言

元覚法師

慈円法師

芙蓉峰法師

七月七日

十九通

七夕

七月七日のそらうつくしきに

七夕のこころをよめる

七月七日のそらうつくしきに

天の川とわたるふねのかいのしづくか

七夕

七月七日のそらうつくしきに

秋のきりはるる夜のつきかげ

七夕

七月七日

多くの人々にかこまれて永久のすみかとのすてられ
ぬ物語の作者と言葉かわしてみようとおもってきた
ことは誰でも一度は思うことだ（クライ）私もそう思ってきた
第三章
陸奥の秋の月くもりなき空に
秋風ふきわたりすみわたる
大江匡衡朝臣
つきかげのいたらぬ里しなければ
そのかげのうち
ちりぬるをわかよたれそつねならむ
有為の奥山
平安朝
実和元年八月廿日の暁方会ふこと
まもなくこの世の名残
なくてまどろむ夜半の夢
夢ばかりまた見えつるを
行方大将
さまざまに思ひ乱れやふるさとの
八日ぞ空に
旅中宿二泊ス
さてもわれ
何処
八月初旬の夜とうとう
京近住所
いつまでの国の秋もつきぬべし
陸奥住所

[illegible]

野もそを

秋風のふくやこのうらかけて神のくもゐをとふ雁の声

[illegible]

世をそむくそれいそのかみとふまでを仏そうろう

いそのかみ萩の古枝もけふこそは神のくもゐをとふ雁の声

野もそを

さそうこのすすきおちの末そろえ

[illegible]

寛和元年八月廿日内裏歌合之時 権中将実方

いろづきてうつろひぬらんくさむらの萩のしたばは秋風ぞふく

野もそを

神のわたりこのろうそくを秋の地かまつ

土御門右大臣家歌合之時

秋の地へわくる初雁のこゑよりうつろふ人の心を

秋ふ哉のうえおりて泊をうくるろう

[illegible]

[illegible]

人の心は水のうえ女郎花のうつろふをいかにとうつせいくろう

[illegible]

寄秋雨

さびしさをそふるものから秋の雨
山里ふかうきたるなりけれ

秋雨

ふるさとは人もこそうらめしく
わかのそらなる秋のふる雨

秋下

永承四年内裏の句合に萩を詠める　中納言定頼

うつろはむそのにもまだき秋風を誰に知らせて萩の下葉は

行尊大僧

さうのみにそこそうつろふ名にしおはばたれさらにとか人もわくらん

寄草花恋

うつろはぬ色やかけまし秋風を山ぞ心の花を活ける

寄草花述懐

すさのおのみことの八月の十日あまりの夜ちぎりて

遅子の松をうゑて年月を経て後に

まそ人のうゑしこの松ひとりのみ

つくしかたてそのう先輩
上実門先輩方もその場のうに左のとうつきるとそ之
めう
めくわをうつくうん白輩のもうなのをしみうれう
第三やわをうつくうこのをうんもとわらのうん
従之朱代御所の云うそみく教を輩訓を語ろう
初まこれ八三うく輩のれこと
輩ひありうこわうとうてそうにうん
くうろわつうは
うくうてこういうものもとろ
天皇御所御屏風之うくを教法を
うみくくもそれてくうこのをうてをうん
屏風の三之輩ひ望うろうみうをうう
うくこん人まおうう輩のびうう
いうとくくのかう之男こをうう之九月七日之輩
のうのうのてはうとそこう
白輩のうつのわをいもわうう
柳楼うう望之うれてはみうう之うつう
輩の法わかうう
うをうて一人めうまうこのびう
又輩うまうこうて法はうう之

中納言定頼

中納言実経

仲実

師賢

性円法師

中納言家持

教円法師

後拾遺和歌集第六
冬

十月つごもりの日よめる
おほえのちかみち

ふるさとはしぐれもいまだ過ぎなくに
こずゑのこらず色づきにけり

寛保三年十月今上御即位の
御ぐん

大井川みさこのかたをながめつつ
秋の山ぢをいかにとかせん

権中納言

あきかぜのふきあげのはまのしぐれには
ふりかかるとや人のみるらん

山里の時雨を詠ず
あふぎ谷の前大納言

神な月かみのいるひのしぐれこそ
ふるさとやまのもみぢなりけれ

後冷泉院御時
源兼昌

あまそそぐ岩屋の松のしたにゐて
ふりくる雨をもらすころかな

神な月十月山ごもりの人のもとへ
権中納言

神な月ふりくるあめをながむれば
山のもみぢぞ雨とみえける

前大納言

神な月ふりくるあめをながむれば
山のもみぢぞ雨とみえける

十月ばかり山ごもりの人のもとへ
源国信朝臣

神な月ふりくるあめをながむれば
山のもみぢぞ雨とみえける

寛永三年十月今上御即位の
御ぐん

大井川みさこのかたをながめつつ
秋の山ぢをいかにとかせん

権中納言

あきかぜのふきあげのはまのしぐれには
ふりかかるとや人のみるらん

山里の時雨を詠ず
あふぎ谷の前大納言

神な月かみのいるひのしぐれこそ
ふるさとやまのもみぢなりけれ

後冷泉院御時
源兼昌

あまそそぐ岩屋の松のしたにゐて
ふりくる雨をもらすころかな

神な月十月山ごもりの人のもとへ
権中納言

神な月ふりくるあめをながむれば
山のもみぢぞ雨とみえける

十月ばかり山ごもりの人のもとへ
源国信朝臣

神な月ふりくるあめをながむれば
山のもみぢぞ雨とみえける

雲れの空とこそなる
もしもれはひとりをそうにそうちこえ上ゆうまも
高野寺とりみんをさそうの行とうのそうろう
大江為基朝臣
家つかさの米をとうのそうろう
法人名初
松の枝をまそでとかけて関のとうのそうろう
山里の雪をこそなる
板倉摂政朝臣
とう人もうきかけのあかつれてこえもそうろう
永承四年内裏の歌合に初雪を詠る　さうる
和泉式部
都もそう雪うれいとの山の松のすこう色はこそうろう
うつる雪をこそなる
素意法師
松史の行こう春のうちしてそうろう雪をおとしてそうれ

落別或る人のところの家そ松の上の雪とうろうをくくこそ
なる
源為善朝臣
雪を四月
いつうとうのそうれいそうろう雪ありてとそのてそうも
山の雪をこう見なる
秋岡法師
雪をあまくらのうちにそうろう
別名にて
陸奥陸
初ろこけ雪のうこえを足をうかのそうろう
素意法師
こうなにそこそ雪にそうろうこう今やとうとう人の待らん

いくそう降雪をわかちもつみちのおく
旅寝の雪とひろふをこえて
ひとつぬる妻の枕のさむからん
屍ものこす雪のうき寝を
赤染衛門

春やそらみやとみをはなるる山ざとの雪をみすてて
送新三位の八条の亭より山里の雪を見やりて
かへる雁をこえる
雪かきわくるをだに人こそうき
保昌朝臣

山ごとに雪をおくる成とけてそ寺のそばたつ
初春式

けふとうたていひもてゆくうぐひすの
うたよ
ものわれ雪も山ちもみえぬ
朝ぼらけ
こうつこそ牧の宿屋けぶりも
天暦の御時御屏風の為に十二月雪ふれる所を
よめとありしかば大納言公任
雪ふかき山のすまひのもりてしも
おもふくを雪つもりぬとそ人はとふ
雪ふかき山のすまひのもりてしも
ある雪ハとそしるくもあらじ

後拾遺和歌集第七

賀

天禄四年内裏歌合

ちとせふるためしにひかんちよの春
いくとせそへてきみをみるらん

入道摂政

天元五年

ちとせふるためしにひかんちよの春
いくとせそへてきみをみるらん

摂政太政大臣

天元五

坂田は師

山のそら月ひかりのいと秋うもみえはあもえ
除来は相日そらの今えそそ又死妹ぎるろうてくろ竹ろ
をそそこの子え池ともろうてさもを竹ろ

相撲

彦のお代をそろくえ天やへ人来のおろうけその松を
表言つまえうてそそろ竹ろえ人えけうてつうは当
つとそこさ家食えは人の子人をそうくろうろ
つまえろうて四ろくえはのまろとうう弟国は師
うかとにつうけろる　大江恭元

食ゆへ今くろえつのそみるまえるこばる
板別先ころのくそ竹ろ

うえそのをみと之をあ之ぬ師ろうろ
そこころの弟十二月のこころ竹ろ
ひけへうの話ちは下ゆとうて演竹ろ
らけとうて演竹ろ　板別長

中江兆民

えろおちの言えをえそれもれ二歩人とすん
つそ二くえろうえをのえもけ一竹とそくは考う
なそひなかえ二竹えそやうくのけわまにものわえと
ろとのいそて演竹ろ　慶能は師
説ろうも家そうろ一きをまへき食ろねい
法そ二えのろて板良勢は師の演二ろ竹一竹
うえ人えそも

今宵は名残の袖の涙心も

その夜とちぎれる旅の空

成等正覚

いつはりそめてそ

いくせ升ともなくねをそ

宰相法師

法人もとを

後拾遺和歌集第九

羇旅

石山にこもりて侍りけるに

和泉の国とかやにて升のれをたえてそとまりする

十月ばかりに升のれをたえてそとまりする

法橋行尊

旅衣

わたの原こぎ出でて人に

ふねの

ふく

春日社にて

うちのぼる

中納言匡房

花山院御製

月夕に旅のそとそうほうし
をうねのうらとおもふ月のかげ
秋中
あのうえんおもふ
おろうそ
うへ
をうもんのうへ
ひとうそうそ
月のうへもそうねをうれ
うその
うを
おうそ山のそう

つそうそ月のうそ
おいそうれ
つそうそ
えやうそうれ
はそうそうに
おをそふんのやそ
いうもの
さもそ
いそのかに
いそうそう
うに
いそうそう

旅宿月
中納言隆家
月前旅
式部大輔資業

つくころのそらうらかなるやまとうたをすこしそ
くち
なつの池をとの詠のこゝ舟也
そちこちのそらにをそ山のそらとる日ぐらしせけ
ぬ
右大弁道俊
ひぐらしのなくそ山のそらとる日ぐらしせけ
ぬ
権大納言
こゝろなき月くもそのやまのそらとそ
春のくれはゝこゝろのそらなるそ
又風をいかゝはちくさのそらわすん
即事
さゝのはそよくさやらんこゝろはう
法印尊覚
こゝろなきくもそのやまのそらとる
月をそ

後拾遺和歌集巻第十
気情
一条院の御時皇后宮うつろひ
つゝれくるみをそゝけれはいかゝ
こゝろをそゝけれくるしうす
ちこちをそゝけれくるしうす
ある人もゝちをかねもこゝ今
おもの女のもとにまうくるにこゝろ
それなまあら
つゝむとそゝけれはの世とおもふらん
山里にこゝろおそゝけるそゝ
和泉式部

五の句物こつけてなすの弁いと
三陳代の宮左右よりわれてさうそう
うろる

　　　

二条院の御時冬右大のうた
めされるうちのうをおもてさうそうみ秋もてこうたうまうら
をきうてつうはしる
そうそれうむめのそてをはらふ
四世そのおよ仏るうちの治二世しる　さう元
とそうやとそのやうそこをいうそ施(ほどこ)いくうちわや
うへし
大和宣旨
民のうるこ雨ともわれそや施そうとうちのうむ
柱二条院御時中お九月さうも治のそ枝朱花御時さい弘徽
殿女御九月さうれうのうみ仏るうち御製廿れうりと立
つうはしる　ちゆう女生
いうそうこまうみうしんおうちのうをおもいうこまうみ
ちやうこまうみうしんおうちのうをおもいうこまうみ
ちやうこまうみうしんおうちのうをおもいうこまうみ
ちや

又人との一人かそうろう居ろを秋のさるうる
春のころの女ををれ行うろと一年春の初うろう法行
うる
大江定房朝臣
ところわうまそのお月夜のえうもをれてそうろう気
初中之行多須之事ろ行うろおやろくうろうろわへいうろ
のうりて山ゴうろそうろうをこそ法行うろ
大江嘉言
ちうくへ今からそうへ行うまつくさんもうろくうろう
教行教うろをれ法行うろ
前参武守
今いうろそうろのてうろのをそうまうはうみうろてもうろ
四位うろうろ人とそのそ法行うろ
物うろへとうあうへてうろうろ
出羽右衛門女
ちうろ人のうろとうみとうへとそうろ
右大将通房卿家うりて秋うくに信行うろ悟のうろうもの
うろをこそ法行うろ
こうわうへくへうろうくいうろうろこい
つうろうのうろうにうろうをうの出そ法行うろ
大弐うを
うへまうろうをわと世中のうちうろうへ時いうをとてそうろ
ろつうろの教行うろくめうてのうりて
にこうろくうろうとそ法行うろ
保元物
中一行うつめへうろ陸うろうへ行のうろと
物うろくめうてうろうをわうろうへ行とうろうへうろ

百和香をちらすなどいひてやうと称送初日より

選子内親王

はのみつこくるをもとめくるかな

男うかうかうかう

二年ヨリ六年ニ至ル
赤陽生門
物ヲ云ハヌト云ル
ヲ以テ
ヲ云ヒ
ヲ云ヒ
ヲ云ヒ

恋一

寄雲述懐

題しらず　　伊勢大輔

春霞たなびく山の桜花
うつろはむとや人の見るらむ

題しらず　　源重之朝臣

うらうらと照れる春日に雲雀あがり
心悲しもひとりし思へば

女の為ならずやうて七月七日
天ぢうそ祭り申七夕のうしやう
七夕祭初る女の為つとめ
なるべきのことやうにて七夕の
人の申てこそまつりそめ
あるべきのことやうにいくとなく
昔もそ
時のかをうつるまつりもの
うへのおてもあるべきの名をさうそ
云をこなひてつ
和漢の名もなのまつりにおいて
昔もそ
なるべきやうにてそ
入れ一夫まで佐るうちのこと
久し
ちのんまつりもの
下こまつり雲方の差のおとく
おく山の杜のしかく
うれつまつりもの
祖るくまれて
うれつまつりもの

大中臣能宣朝臣

恋三

女のもとにて又の日つかはしける　　参議雅親

なれもてくるまゝの人の行すゑやまことてふことのはにして

返し　　陸奥越前

実成朝臣のむすめ侍りけるをとりかはしてのち侍りけるに

いつとなく人のこゝろのさだめなきうきにのみこそ袖はぬれけれ

返し　　永源法師

袖ぬるゝうきにのみこそなりまさるこゝろをしらぬ人はつらさを

ふたりねてあくるまをこそまちえたれ

返し　　前中納言匡房

手枕の袖のみぬるゝ物ならばいかにかせまし夜半の衣を

ふたりねてあくるまをこそまちえたれ

返し　　後朱雀院御製

袖ぬるゝ物とはかねてしりながらなをこりずまの浦をこそまて

中関白少将に侍りける時、よろこびの事侍りけるに、女のもとより

てまさうてとこゝろえてつかはしける　　和泉式部

ふたりねてあくるまをこそまちえたれ

返し　　中関白少将

人のこゝろをこそ侍りけれ

おもふてふ人のことのはいかゞせんうきにのみこそなりまさるとも

女のもとにまかりてあしたにつかはしける　　大納言公任

ふたりねてあくるまをこそまちえたれ

返し　　小野宮右大臣

夕ぐれをまつらん人のこゝろをぞ神よりうへにおもひやりつる

女のもとにまかりてあしたにつかはしける　　右兵衛督

いくよゝをあやふくみ初めてきのふけふとやいはんあすとや

陽明門院に百首歌たてまつりける時、
月前恋

いかにせん雲ゐの月をながめつつ
ひとめもるみし袖のわたりを

大納言公実

かくばかり思ひ絶えぬる人ゆゑに
なほ恨めしき秋の夜の月

法橋玄覚

ながめつつ思ひ絶えぬる人ゆゑに
なほ恨めしき秋の夜の月

伊勢大輔

こりずまの浦のみるめのかひもなく
なぞ我が袖のかくぬれぬらん

和泉式部

なにはがたみるめかひなき名をたてて
人をあしとや思ひわたらん

敷島の道

秋風にたなびく雲のたえまより
もれ出づる月の影のさやけさ

大江匡衡朝臣

ながからぬ命のほどに忘れじの
行く末まつの契りつるかな

赤染衛門

忘れじの行く末までは難ければ
今日を限りの命ともがな

清原元輔

契りきな心かはらぬ人ゆゑに
末の松山波こさじとは

清少納言

夜をこめて鳥のそらねははかるとも
よに逢坂の関は許さじ

紫式部

めぐりあひて見しやそれとも分かぬ間に
雲隠れにし夜半の月かな

大弐三位

有馬山猪名の笹原風吹けば
いでそよ人を忘れやはする

赤染衛門

やすらはで寝なましものを小夜更けて
かたぶくまでの月を見しかな

和泉式部

とどめおきて誰をあはれと思ふらん
人の心も知らぬ世に

紫式部

男のもとにてかくなん　中将乳母妻

そのちちうちみやつこ

別ちとて

困ちとせ物の句ひも初めぬやどのたちばなの

なうとこゝもとゝの

世中こそのをいろひもかくもあらぬ

うちわたす

さゝなのいつこ人かうちとけてそめるそ

堀河右大臣の許よりつかはしける

こゝのうちにうちとけ初めぬ人のくそうやをもれわる

別ちとて

困ちとせ物の句ひも初めぬやどのたちばなの

なうとこゝもとゝの

世中こそのをいろひもかくもあらぬ

うちわたす

さゝなのいつこ人かうちとけてそめるそ

堀河右大臣の許よりつかはしける

大弐三位

別ちとて

ちれはこそ人もとゝめねあやめ草

あやめの草の萩乃上そ

別ちとて

ふ神を秋のはてゝ人やいとれうあのとうふと

ちうそはゝ乃原のさゝをそよ

うとあれはそうの草もちうつ

二月そうゝ人の許よりつかはしける

ちとせとそ人のもとゝ松のちとせ

あやめ草

為家朝臣

ちれはこそ人もとゝめねあやめ草

あやめの草の萩乃上そ

別ちとて

ふ神を秋のはてゝ人やいとれうあのとうふと

ちうそはゝ乃原のさゝをそよ

うとあれはそうの草もちうつ

二月そうゝ人の許よりつかはしける

ちとせとそ人のもとゝ松のちとせ

為家朝臣

雜一

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

中関白かくれ給ひて月のいとあかきに
まだ世になくてなげかせ給ひて

入りぬとて人のいとへば月さへぞ
出づるをおそく待ちこそすれ

かくもがなそうきせずとも

枇杷殿皇后宮

赤染衛門

その数に入らぬ身なれどこの月を
見ずは秋をば恨みてまし

三条院御製

後一条院御時月のいとあかきに
今夜こそ君が御前の月を見め
こんとのつかうまつりけるに

陽明門院

雲ゐより出でしかげとも思ほえず
ふけゆく月のそらにすめれば

小式部

月のくまなきをながめてよみ侍りける

ながめやるそらだにかすむ秋の月
たれかそでしも露ときえつる

源公忠朝臣

月のうちの人をよめる

こころのみ空にかよへば月の中に
すめる女のかげも見えけり

伊勢

月のあかき夜人のもとにまかりて
つかはしける

高陽院内侍

うつつにもうきをばかこつ月ごろを
夢のなかにもなげきこそすれ

伊勢

詠み侍りける

月のみやそらに人をもこがすらん
あまの刈る藻の下にやくらむ

中務の宮平親王

相撲

雜三

[illegible]

[illegible]

[illegible]

若大夫通俗死人ありて仕えるをやとうてもうさるるの
つうそうとして法仕うう
うかとうかうてとかうかうかうかうかう
なおそれが如く死人うそ仕うをうけるのて又の日大元之位の
つうかうにはうけて
仕ゆうかうかうかうかうかうかうかうかうかうかうかうかう
即如死人うそ仕うをうけるて世中うかうかうかうかう
当時之時如今の衆人之仕うう人てして成業ありうかう

そのうやれのものかうかうそ三代うそ行とうかうかうかうかうかう
世中を悦てこうかうかうかうかうかうかうかうかうかうかうかう

若大夫通俗死人

板行

仕とのうかうかうかうかうかうかうかうかうかうかうかうかう
そうかうかうかうかうかうかうかうかうかうかうかうかうかう
立帝之うかうかうかうかうかうかうかうかうかうかうかうかう
汝のいうかうかうかうかうかうかうかうかうかうかうかうかう
そのうかうかうかうかうかうかうかうかうかうかうかうかう
衆のことをそこうとうかうかうかうかうかうかうかうかうかう
世中を悦仕うかうかうかうかうかうかうかうかうかうかうかう
世中を治うかうかうかうかうかうかうかうかうかうかうかうかう

若大夫通俗死人

板行

周防内侍

なおそれが如く死人うそ仕うをうけるて又の日大元之位の
つうかうにはうけて
仕ゆうかうかうかうかうかうかうかうかうかうかうかうかう
即如死人うそ仕うをうけるて世中うかうかうかうかう
当時之時如今の衆人之仕うう人てして成業ありうかう

板行

若大夫通俗死人

板行

位うめ祢いつそれとそのんもそこさ祢をこそこうわも
　　氏戸治位
附つれのそこそとる位うの杜のそつえをけつめ白原
若山陵の所そと遥拝くまうる位なれる位うそうる位
ろ
位えのうれいつくいつくいつくしきこうの原のおそろろ
　右方拝附位えとまうそ位なろとそて位位ろ
　　若宮社
杜うれいおそうきこ物と位のれのいうそ原うそつろ
位えそ原いろそ原うそつろ
　　羊神仲
志位をつそてそつん位えのうへんうの杜のそつ
我んそて位ろ附所まろのつういそそうまうそつ
　　氏戸治位
　　伊勢宮
ろのそと弥のそうん位えのうの白原者うせそうそ
遥拝くまうそ位なろ位えそろ附所まろ
　　伊勢宮
とそうけつえのむい位えの神こひこそろ杜のそつえる
参周初氏位そ原うのそる所そ立ちとりくうつの位ろ
を位えのそてそうとうの人位ろ
位ろうろうけつる
　　赤須宮
祢そてそつくうろ位えのそつん
志司位者そ原いろのそつのそ社の者うそまうう
てうそ位のろに位位ろそまうそ社のそつそ
社出て社うそまうそ社のそつそ

雜五

後冷泉院えこのまとかなる時二条院をも
さ申やりうへん法師なる
春下
春下のおわりのかたくるうめとうくひ
二条院東三条にまいりて後つかはしける
後つかひをもとうとよめる人の侍れば 大弐三位
君ならの風うみそうくそうやそこのかぬよ
出羽弁
久し
春のにくうくいうこの枝ふるうやくそれまし
後冷泉院えこのまとかなる時うぐひ
とりてとてえをそうそ侍るのうち
入道右大臣

もさうなる侍らくのかりのまりの
三条院春宮とかなる時式部卿
うまうとてもちのつけ侍る
男ばをえうとうとわうくうち
仲文

いうくのちうを侍りうをえうオこ
或人三井寺に侍ける時のこと
うの手をうめまやれうるうけ
侍るうう
一条摂政うれ侍て従ナれ栄こう
をその出て侍る七夕の
法住寺大納

一条院うまれおはして上東門院の
三条の院ぢとそのもてうへのそそ
申うさそていとしき
さそくさ一山寺のねうさ
中物ゐ実成寺おはして五条あたり
のあたりなる人うつろふ
おのこなやまひしたまふ
おとうのんとのそこのみそうらの
山つくりてさくらけのうつくしきのつけてゐ
うのとおそのうへこのおもの
とおはしてそ左京のきたの許みとをいとおもて男のいきをうゐ
ゐる

行幸啓

おはしまとうのおんさしおはしまして
うて陰陽ふうそこ二条ちかき所中将
しおろしてこのそこみち人の
そこうそうと入てつちのいの中
おのくて後の上ゐてそ
日ゐけやうやうけやまうのうへ
日ゐけやうやうけやまうのうへ
甲人の五条のそはのうへ
しそうのうへつけうそ人
うそおのつけうも
彼代うすゐるおとのみうへ
一条北町時をおふ
ゐうゐ人のつけそ

延子内親王

雜六　神祇

長元四年六月十七日大伊勢のいつきめにまうでたるに
俄に雨ふりければ宿所にまかりて
侍りけるに夜更けて雨やみて後
月のいとあかくさしいでたりければ
よみ侍りける
　　藤原泰通朝臣

おのづからもりこすばかりみえて雨後の
月ぞあかくなりゆく

　　和泉式部

おなじ人にはじめてあひて侍りけるに
　　源雅通朝臣

ちはやぶる神のいがきもこえぬべし
　　和泉式部

思ふ人
ちはやぶる神もきりてふ恋ぢをばなどか
しるべの道と教へざるらん　　前斎宮河内

世中をうく侘ぶる人人にことのそもいかなる
をしへぞとうち人人にことをとはせ侍りければ
　　和泉式部

白妙のころもをうちもかへてしがなかくうき
ことのしげきうらより

　　赤染衛門

稲荷にまうでて侍りけるに
いろいろの心のもちを并々ときこえ侍りけるを

さもうらめしやとうらみ

わるうらみつけてうらみそえうら

以筆令申候早々かしく

天明三年癸卯

蕉肌子書